会員からの近況報告

社会の第一線で日夜ご奮斗の諸兄諸姉、あるいは学園で勉学に精進の方々……。代表の方から近況をご報告していただきました。皆さんもどしどしお便りをください。（係より）

一回生　田中　吉晴
（会社役員）

昭和四十二年に第一回卒業生として、一宮西高校を卒業以来、はや十七年過ぎました。卒業当時は、経済の高度成長期に支えられた裕福な物の時代でした。しかし、昭和四十八年の石油ショック以降低成長期に入るとともに、物から心の時代へ移行し、その現実の厳しさを垣間見てきました。

現在は、時代の先端を行くコンピューター関係の仕事に携り、システム・プログラムの開発からコンピューター機器の販売まで、毎日気ぜわしく飛び回っています。

街角で見かける西高生の姿や、田園に際立つ校舎を見るにつけ、当時の学生生活が懐かしく思い浮かんできます。体育館がなかったためグランドでバスケットボールや、バレーボールの練習をし、勿論、プールなどもありませんでした。しかし、今では質・量とも充実し、県下有数の高校になったと聞いております。

西高も昨年は、盛大に二十周年記念を迎えられ、いよいよ社会の期待を担う時代がやってきたと痛切に感じています。

実業界においても多数の後輩の皆さんの活躍を目にし、大変喜ばしく思うと同時に、私自身の励みになっています。

おわりにあたって、同窓生の皆さんの一層のご活躍を祈念致します。

三回生　真野　博
（一宮市立宮西小学校勤務）

ふと自分をふり返ってみると、高校卒業以来十数年がたとうとしています。改めて月日のすぎるはやさを感じました。

近況報告をといった依頼をうけ、遠くなつかしい高校時代を思い出す次第です。当時一宮西高は創設期にあたり、我々が入学した時点で、ようやく3学年がうまる、といった調子で、グランドを見れば周囲には草が茂り、プールはもちろん、体育館もないといった、ないないづくし状態での学園生活でした。また学年4クラスながら定員212名、クラス53名のすしずめの教室の覚えがあります。今はだいぶかわったと思いますが、田園の中の学校といったイメージが強く残り、のんびりのどかな高校生活を送った人が多く、勉強より部活、遊びに重点がいきがちで、受験にあたっては、各先生方を悩ませたのではないかと思います。

大学卒業はどういう因縁か、小中学校の教員として勤めています。以前は中学校の教員として、西高とのかかわりが多少はあり、送り出した卒業生もいた関係で、大学合格者などで西高の名を見るにつけ、いろいろな感慨にかられたり、卒業生一人一人が進歩していく姿を想像するだけでうれしく思ったりしたものです。

さて今では、「おはようございます。」の明るく、元気のよい声で毎日のスタートをきる小学校に勤めて、二年過ぎました。ともすると毎日の忙しさのためか、子どもとの生活のためか、自分の年を忘れてしまうような時もありますが、「おじさん」とよばれてもおかしくない年代です。若さを忘れることなく、心して生活せねば、と思う次第です。

西高関係者のますますの発展を祈念いたします。

六回生　岩田　均
（稲沢市立稲沢西小学校勤務）

一宮西高校を卒業して早や十二年、我々の学年全員がもう三十路にはいってしまっている。いいおじさんであり、おばさんになってしまった。

現在、稲沢市の一小学校で教師として子どもたちと毎日を過ごしている。六年生を昨年度に続いて担任しているが、今の子どもたちの考え方が時々理解できないことがあると、まだ早いとは思うが、年をとったな、と思うのである。自分たちの子どもの頃と何のかわりもないように思うのだが、まさに時代は変化しているのである。

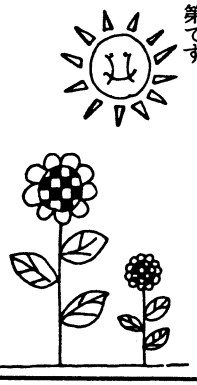
六年生ともなると、大人の世界にいろいろと興味を示すようになる。男子はまだ体格的にも精神的にも子どもであるが、女子はすでに思春期に突入しているといってよい。しかし、このことは我々の時代でも同じであったと思うのだが、我々の時代とちがうのはまず情報量の多さである。テレビ・ラジオ・雑誌など、子どもへの情報量は我々の時代の数倍以上といってよいと思う。またその情報の内容も大人が子どもに本当に与えてよいか否かを吟味しているとは思えないようなものも多い。このため子どもたちは判断力を十分身につけないまま、大人の世界へ直接行動をしかけようとしているように思えるのである。

生徒指導も担当している関係で、現在問題になっている少年非行も身近かに感じているが、やはり痛切に感じるのは、子どもよりもまず、大人である我々が姿勢を正していかなければならないということである。これから親として、家庭を背負っていく世代として、子どもの未来を考えていってほしいと思う毎日である。

七回生　大島　誠二
（自営業）

学生時代、勉学一筋で、学校と自宅の往復だった私を知る人は数少ないかと思いますが、名岐バイパス一宮インター北の〝ゆうとぴ庵〟なら、御存知の方も多いかと思います。開店以来七年になり、小さい店ながらスタッフも十三人を擁するに至り、戦争の様な毎日を過ごしています。来年早々には、新規に西洋料理の店を開店する予定で、今は名古屋の某フランス料理店へ修行に行く身です。

料理というものは奥深く、十人十色の味覚に対し完璧ということは皆無ですがおいしいといって頂ける時が私にとって最高の瞬間ですので、それを商売にして儲けるなんてことは心苦しい限りです。

今回の計画では、六回生の内田史朗さんにオリジナルの食器を焼いて頂こうと先日窯場へお邪魔してきましたが、本当にどこでどんなつながりが生まれるかわからないのが、人生のおもしろくもありこわいことでもあります。いろいろの出逢いの中から、いろいろのことを想い、学び、そして感謝する気持ちを持って、出逢いそのものを大切にしていきたいというのが、今の偽わらざる心境に他なりません。人を思いやること、人とのつながりの大切さは、今の私自身が、商売を通して教えられたひとつの信条にもなって居ります。

当店の店長の成瀬大三君も私と同期の西高生ですし、数多くのお客さんの中にもよく西高の先輩・後輩だという方々に出会いますが、二十周年を迎えた一宮西高にその歴史と愛着を感じながら、益々の発展に期待しつつ、自らもその名に恥じぬ〝何か〟を残していきたいと思う次第です。